

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	田村 紋女												
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当														
<p>論 文 題 目</p> <p>サイコパシーの社会的行動のメカニズム - 認知機能に着目した検討 -</p>															
<p>論文審査担当者</p> <table border="0"> <tr> <td>主 査</td> <td>准教授</td> <td>杉浦 義典</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>辻 学</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>岩永 誠</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>坂田 桐子</td> </tr> </table>				主 査	准教授	杉浦 義典	審査委員	教 授	辻 学	審査委員	教 授	岩永 誠	審査委員	教 授	坂田 桐子
主 査	准教授	杉浦 義典													
審査委員	教 授	辻 学													
審査委員	教 授	岩永 誠													
審査委員	教 授	坂田 桐子													
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>サイコパシー傾向の高い人は、攻撃のような反社会的行動を多く示すと同時に、人助けなどの向社会的行動は少ない。本論文は全六章からなり、他者の気持ちなど、自分の利益以外に注意が向かないことが、これらの問題行動の共通要因であるという仮説を提唱し、実証データによって検証したものである。</p> <p>第一章では、文献研究から、サイコパシー傾向の高い人の示す問題行動の多くは、他者の気持ちを察する機能である共感性が低いことから派生するという予測をたてている。さらに、サイコパシー傾向の高い人の共感性が低いのは、情動反応が全般に弱いためではなく、自分の関心のあること以外に注意が向かないという認知の特性によるという仮説に基づいて、注意機能や実行機能といった認知機能によって攻撃性や向社会的行動を説明するという研究の方向性が示された。</p> <p>第二章では、サイコパシー傾向の高い人は、共感性が低いために向社会的行動が低く、攻撃性が高いことを調査データから明らかにしている。</p> <p>第三章、第四章では、注意機能の実験的な測定を行い、サイコパシーの人の共感性が低いのは、注意の選択性が高いことによることを明らかにしている。とりわけ、第三章で、他者と情動を共有する情動的共感性には、より自動的で低次の注意機能が影響していることを明らかにしている。一方、第四章で、相手の立場に立って物事を見る認知的共感性には、より高次の注意機能である実行機能が影響していることを明らかにしている。また、第四章では実行機能が高い場合に、サイコパシー傾向は、認知的共感性の低下を通じて攻撃性につながることも確認され、第二章の知見との統合がなされている。一方、注意機能の低い場合は、怒りを抑えられないために攻撃性が高くなるという、共感性の低下とは別のメカニズムもあることが示された。</p> <p>第五章では、サイコパシー傾向の高い人の向社会的行動の低さは、実行機能の高さによることを明らかにしている。これは、認知機能が共感性というメカニズムを経由せずとも向社会的行動の低さを説明できることを示しており、仮説の応用可能性を示す。</p> <p>第六章では、全体を総括し、仮説モデルのもつ説明力や応用可能性、今後の展開の可能性が</p>															

述べられた。具体的には、サイコパシー傾向の高い人は情動反応が全体的に低い、という有力な代替仮説では一連の研究知見を説明できないことを論証し、認知機能からサイコパシーと反社会的行動の関連を説明する有用性を論じている。さらに、認知機能に介入することで、これまで改善の難しいとされたサイコパシーの反社会的行動の低減可能性も示唆している。

本研究は、サイコパシーが反社会的行動につながるメカニズムを、注意機能と実行機能という認知的なメカニズムから統一的に説明するという独創的かつ大胆な着想に基づいたチャレンジに富んだ研究である。その過程では、質問紙による測定と実験的な注意機能の測定を精緻に行うなど、研究の方法論は着実なものである。攻撃性と向社会的行動は、それ自体が複数の側面に分かれる現象である。このような多様な現象が、「自分の関心のあること以外には注意が向かない」という共通のメカニズムで説明できるという研究知見は、サイコパシーの理論的な理解にも大きく寄与する。また、反社会的行動を低減する方法についての実践的な示唆にも富んでいる。このように、理論・実践の双方に寄与があると評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。